



ヨハネ福音書1:1-2:12

ヨハネ 1:1-2:12 / 2:13-4:54

2017.4.14

2:13-4:54

神の子を信じる者ら

生きる

1:1-2:12

預言された

神の子が来た

過越祭 ^{2日目} → ガリラヤ ^{4:54} のしるし

世が救われる

霊とまこと

生まれる. 生きる

御霊におよぼす

アダムとイブ (Gen.2:-3:)

水. いち. 生きる

はじめに ^{3日目} → ガリラヤ ^{2:11} のしるし

世に来た.

恵みとまこと

子と子.

預言のことば

創造の7日間 (Gen.1:-2:3)

光 栄光

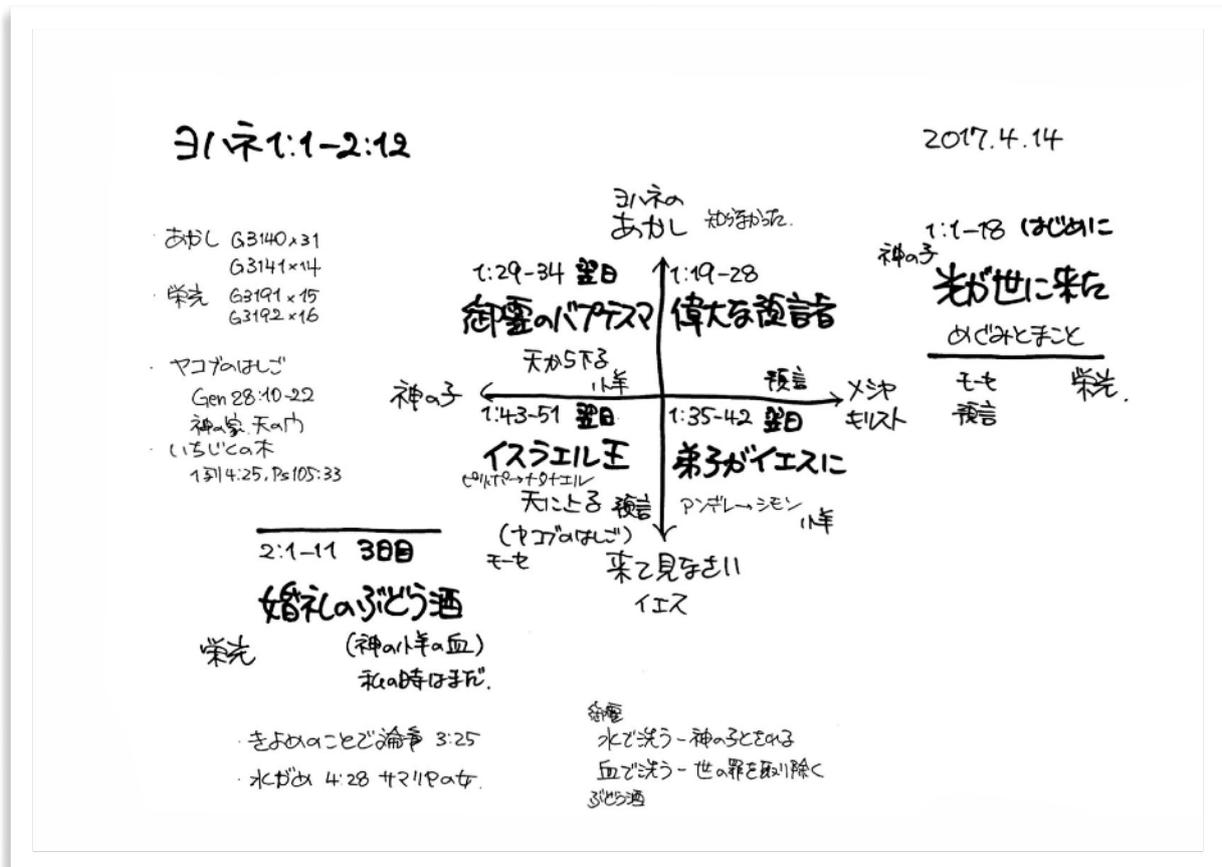
ことば

ヨハネ福音書1章からの分析です。1章1節から2章の12節までと、2章13節から4章54節まで。この2つの段落がヨハネ福音書の出だしのストーリーの種の部分です。1章1節から2章の12節までは「初めに」というところから始まって、「カナのしるし」で終わります。2章13節から4章54節までは「過ぎ越しの祭り」のところで始まって、「これをガリラヤでの第2のしるしとして行いました」というところで終わりますので、この2つが大きな流れになっています。「神の子が来た」という方と「生きる」。神の預言されていた「神の子が来ました」。その神の子を信じるなら「生きる」というのが2つ目の段落です。

この1から2までのところが「初めに」というところから始まって、「その翌日、その翌日、その翌日、3日目に」ということで、創造の7日間を連想するということです。初めに言があった。光があつたりしますよね。それで最後に、7日目に結婚式、安息の象徴ですね。祭りで終わるといふ、栄光で始まって栄光で終わる。このストーリーが、ヨハネの最初の段落です。

光が世に来ました。神の子が来るということなのですけれども、この光としての言葉であり、光としての神の子が世に来たということですね。「世」ということばが非常にヨハネに特徴がヨハネの福音書で特徴あるキーワードたくさんあります他の3つの福音書と違った特徴があるということは読めば皆さん気がつくところですが言葉の出てくる回数も特徴があるものがたくさんあります。父とか、信じる、知る、世、世とい

うのが58回出てくる。その世に来るといところが最初です。それで最後が、ぶどう酒の婚礼のところで終わるのですが、この間に1、2、3、4つという段落があると思います。この最初の前半の2つのところは、バプテスマのヨハネが証をするという段落ですね。後半の1章35節からのところは、「来て見なさい」というふうに、イエスご自身が現れています。



前半の2つ(1:19-28、1:29-34)は、「バプテスマのヨハネはキリストではありません。水でバプテスマを受けているけれども、あなた方が知らない方が来ます。その方の靴の紐を解く値打ちも私にはない。その偉大な預言者が来ます。」と言っています。その預言者が来ました。「神の子羊である。その人はこの人ですよ。」とあります。それでここに「知らない方、知らない方、知られなかった」とあります。その知らなかった天から来た神の子、天から下ってきた神の子、めぐみとまことに満ちている神の子ということを証しているのが、この最初の2つです。

次のところ(1:35-42、1:43-51)は、アンデレとシモンペテロ、ピリポとナタナエルというふうに、弟子たちの間で証言があるような感じですよ。そのところでは、弟子がヨハネからイエスに移っていくという感じですね。イスラエルの王が「あなたはイスラエルの王です」というふうにナタナエルが言うというところです。神の子ということ、イスラエルの王であるということなのですが、ここ(1:49)も神の子ですね。

こっち(1:29-34)は天から下ってきた。こっち(1:43-51)は天と上り下りしている。このヤコブの梯子を思い出す言い方です。イスラエルはぶどうの木とか、イチジクの木に例

えられていますね。その天と地をつなぐものとしての、イスラエルの王がきましたという
ことを、証言しなさいと言われてるところですね。

キリストはメサイアであるということが、こちら(1:19-28、1:35-42)の共通点です。
「あなたはキリストですか」「いや違います」と言って、「イエスがメサイアです」と。
「イエスはメサイアだ」とアンデレが言うというところでも分かるように、イエスが預
言されていたメサイアですよということと(1:19-28、1:35-42)、そのメサイアは神の子
である(1:29-34、1:43-51)ということがあります。ですから、メサイアです(1:19-28)。
神の子です(1:29-34)。メサイアが来ます(1:35-42)。神の子です(1:43-51)。それがヨハ
ネのあかし(1:19-28、1:29-34)と、イエスご自身を見なさい(1:35-42、1:43-51)と言わ
れることで表されているということです。

見よ神の子羊(1:29-34)、見よ神の子羊(1:35-42)ということもありますね。預言され
ている(1:19-28)。ここもモーセと律法の預言(1:43-51)。ここにモーセと律法の預言が
成就していると(1:1-18)。預言(1:1-18)、預言(1:19-28)、預言(1:43-51)、子羊(1:29-34)、
子羊(1:35-42)。

この婚礼のぶどう酒のところ(2:1-12)。ここで(1:29-34)は、水の話、水と水のバプテ
スマと御霊のバプテスマの話をしていますけれども、洗いきよめるということですが、
この7節のきよめの水(2:1-12)は、イエスの血の水、ぶどう酒の水に変わっていると。
水で洗って神の子とされる。血で洗って世の罪を取り除かれるというようなことをこの
ぶどう酒の例えで言っているということが、その並行でも分かるかと思います。その意
味で7日目の婚礼のぶどう酒は、小羊の血であるということです。預言(1:1-18)、預言
(1:19-28)、子羊(1:35-42)、子羊(1:29-34)、預言(1:43-51)、子羊(2:1-12)という並行も
見ることができるかと思います。

初めのその光、初めから7日目までの神の子が世に来ました。恵みとまことに満ちて
いる。子とされること。預言のことば。光と栄光。これが最初のこちらの段落のまとまり
ということが見えるかなと思います。